外国人として生きる

講師の道をえらんで

薛 羅軍（セツ ラグン）

国立民族学博物館共同研究員

研究や教育への意欲

何年か前、中国でのある学会でのことだった。中国人の学者が、参加者の一人である日本人から受けとった名刺を見て、わたしにたずねた。「非常勤講師というのは何でしょうか。何か非常に勤勉な講師のことですか」。わたしはそこで、非常勤講師の「非常勤」というのは「常勤」に対することばで、中国語でいうなら「兼任講師」にほぼ相当するということを説明した。

こういうわたしも日本での身分は非常勤講師である。日本のある大学で非常勤の職についたのは、一九九六年大阪大学大学院文学研究科の博士後期課程に入学した翌年からで、もう一〇年にもなる。この身分は二〇〇〇年文学博士号を取得した後も変わっていない。

近年日本における中国からの留学生は膨大な数に上り、二〇〇四年末の統計では約八〇〇〇人にもなるという。留学生のなかでは最大のグループで、さらにその予備軍の就学生五七〇〇人がひかえている。そのかなりの割合の学生が日本での就職を希望しており、実際に現在、終了後も日本の大学で専任教官として教育や研究にたずさわるのは二〇〇〇人ともいわれるほどだ。なるほど、最近ではどこの大学でも中国語や中国関連の授業はあるし、中国人の教員を見かけるようになった。特に中国語の授業は、中国の経済や文化の発展とともに近年急増した。そして、このような専任教官とともに中国語の教師として教壇に立っているのが、多くの中国人非常勤講師である。

非常勤講師という職は、特に本務校をもたない教師にとっては、いくつもの学校をかけもちせざるをえない場合もある。これら授業の準備や宿題のチェック、そして移動に時間を費やしながら、自分の研究に時間とエネルギーをさくのは大変なことだ。それでもほとんどの非常勤講師は、わたしも含め、自分の専門分野の学会に参加し、論文を書いては公募される専任教官の職に応募を続けている。研究や教育への意欲では専任も非常勤も変わりはしない。実際に非常勤で博士号をもつ人や、優秀な業績をあげている人は少なくない。

中国語教育に貢献

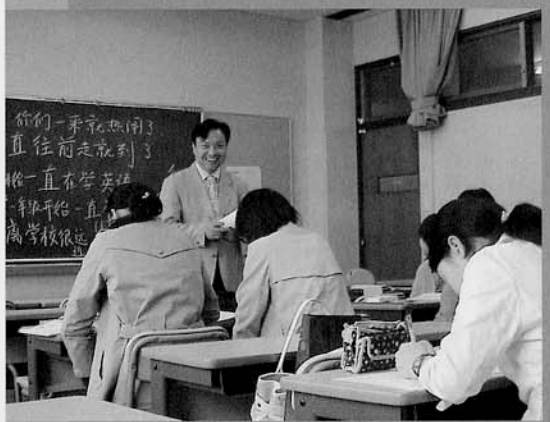
中国語の教育に関していえば、最近は日本の少子化の影響で学生が減り、多くの大学で一度設けられた中国語授業でも受講する学生数が伸び悩んでいる。ところによっては学生数が減ったために講義が削減されたりしているらしい。しかし、多少浮き沈みはあっても、今後、日本とアジア、特に中国との人的な交流はますます盛んになるだろう。実際、中国では、日本語を学ぶ学生はかなりの数に上る。日本でも中国語を学ぶ人は増えてほしいと思う。相互のことばの学習者数のいびつな増加は不自然だ。

わたしは中国語を多くの大学で教えてきたが、じつは、専攻は中国の音楽文化や音楽芸術である。大学では中国各地の少数民族の地をフィールドワークしながら調査研究した。それでも幸いなことに、かつて中国では中国語の教師をしたこともあり、日本での語学の担当はまったく苦痛ではない。それどころか、日本語の特徴や日本語と中国語の漢字との違いを発見しながら学生に中国語を教えるのは楽しいことでもある。また、文字の起源やそれが使用されている社会、文化の理解にも、わたし自身の経験を生かそうと常に考えている。おそらく多くの中国人教師のこのような生の体験は、日本の中国語教育に貢献していると思う。

二〇〇二年から、わたしは、専門の芸術学や音楽学、中国民族学や文化論の講義の担当を依頼され始めた。今では、毎年夏には、大学時代の研究の原点でもある中国の湖南省、貴州省、山西省、陝西省、内蒙古などのフィールドにもおとずれ現地の学生と調査し、冬には集中講義で呼ばれる中国の大学で学者との交流もしている。そんなときには、小学三年生の息子もわたしに同行し、年に二回は祖父母のもとで生活させている。日本の学生には外国語として中国語を教えながら、家では息子に母語としての中国語が大切だという考えをもっているからだ。息子には努めて中国語で話してきたが、家の外では日本語ばかりで、中国語に少しずつおぼつかなさも感じていた昨今だ。学生時代、日本語に苦労してきたわたしにとって、両言語を自由に話す彼の将来は楽しみだ。きっと彼にとってはいい財産になるだろう。

中国でのフィールドワーク。中国人の学生とともに

中国語を教えている日本の大学の卒業式



京都の平安女学院大学での授業風景

日本の学校に通う小学3年生の息子と

「功夫不負有心人」

とはいえ、わたし自身は、専任の教官となる希望はすててはいない。他の研究職や専業をもっていたり、少しであれ学生に教えることが好きなために非常勤講師をえらぶ人も多い。しかし、わたしにとって、今の研究課題に専念し、また前述したような理想的な授業のために時間を確保するには、専任という職が必要だ。今の日本の現状では確かに専任への道はやさしいことではないだろう。しかし「功夫不負有心人」。あきらめなければ報われる。中国語の授業で用いてきたことわざは、わたしのためのものでもある。